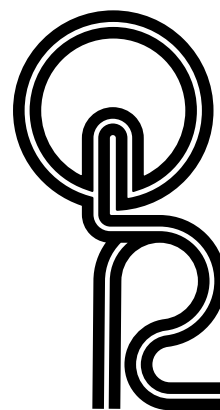


QR Newsletter

第四紀通信

Vol. 7 No. 4, 2000



モンゴル・ウランバートル郊外(48.0°N-107.0°E)のアースハンモック。草原では構造土を見ることが少ないが河川沿いで地下水位の高い場所には30cm以上の凹凸をもつアースハンモックが見られる。撮影：奥村晃史

Vol. 7 No. 4

August 1, 2000

日本第四紀学会 2000 年大会	1	地質科学関連学協会連合設立	15
2000 年大会プログラム	5	研究集会の案内	16
テフラ研究委員会	11	古生物学研究連絡委員会議事録	20
アジア太平洋層序研究委員会	12	第四紀研究連絡委員会議事録	21
INQUA 招致に関する検討	12	第四紀学会幹事会議事録	22
自然史学会連合シンポジウム	14	会員消息	22

日本第四紀学会 2000年大会 - 総会・研究発表(第4報)

一般研究発表・シンポジウム 第四紀学会・国立歴史民俗博物館共催
プレシンポジウム 第四紀学会・千葉県立中央博物館共催
会 国立歴史民俗博物館・千葉県立中央博物館
場

1. 日程の概要
一般研究発表, シンポジウム, プレシンポジウム, 総会, 評議員会, 懇親会, 巡検
2. 会場案内 国立歴史民俗博物館・千葉県立中央博物館
3. 講演要旨集
4. 参加費
5. 懇親会
6. 大会プログラム
大会特別価格ブックセール
学会からのお知らせ(委任状のお願い)

1. 日程

2000年8月23日(水) プレシンポジウム 千葉県立中央博物館講堂
「房総半島の第四紀 - 地層・地形から読む海水準変動とテクトニクス」
10:00 ~ 16:25 プレシンポジウム講演(PS1 ~ 11)

2000年8月24日(木) 一般研究発表 国立歴史民俗博物館講堂
9:30 ~ 10:54 オーラルセッション(O1 ~ 7)
10:54 ~ 11:06 コーヒーブレイク
11:06 ~ 12:30 オーラルセッション(O8 ~ 14)
12:30 ~ 13:30 昼休み(幹事会 第1会議室)
13:30 ~ 14:26 ポスターセッション ショートサマリー発表(P1 ~ 28)
14:26 ~ 16:00 コーヒーブレイク・ポスターセッション 第2研修室
16:00 ~ 17:24 オーラルセッション(O15 ~ 21)
17:30 ~ 19:30 評議員会(第1会議室)
ポスター展示時間 12:30 ~ 18:00 第2研修室

2000年8月25日(金) 一般研究発表 国立歴史民俗博物館講堂
9:30 ~ 11:06 オーラルセッション(O22 ~ 29)
11:10 ~ 12:30 日本第四紀学会総会 講堂
12:30 ~ 13:30 昼休み
13:30 ~ 14:42 オーラルセッション(O30 ~ 35)
14:42 ~ 16:00 コーヒーブレイク・ポスターセッション 第2研修室
16:00 ~ 17:12 オーラルセッション(O36 ~ 41)
17:30 ~ 20:00 懇親会(国立歴史民俗博物館大会議室)
ポスター展示時間 9:30 ~ 17:30

2000年8月26日(土) シンポジウム 国立歴史民俗博物館講堂
「21世紀の年代観 - 炭素年から暦年へ」
9:30 ~ 17:15 シンポジウム講演(S1 ~ 8)

2000年8月27日(日) 巡検

案内 岡崎浩子(千葉県立中央博)・中里裕臣(農業工学研)・佐藤弘幸(静岡聖光学院)
「地層から読む海水準変動とテクトニクス」

- * オーラルの講演は例年通り1会場で行われます。発表時間は1件12分で質問時間を含みます。ベルは1鈴8分、2鈴10分、終鈴12分です。2鈴で講演を終え残り時間を質疑に充ててください。
- * スライドとOHPはそれぞれ1台ずつ、同時に使用可能です。
- * 一般研究発表でのスライド・OHPの使用は合計で8枚以内をお願いします。スライドは発表30分前までに会場入口のスライド受付係に提出して下さい。各スライドには順番、上下左右を明記するか、あるいはご自分でマガジンに入れて下さい。OHPはご自分で操作して下さい。
- * ポスターセッションは横90cm、縦210cmのパネルが用意され、ポスターの展示は3日間通しが可能です。掲示時間は24日(木)12:00～25日(金)17:30としますが、26日(土)17:00まで掲示可能です。なお、24、25日午後のコーヒブレイク時間には質問等が受けられるよう、発表者はできる限りポスターセッション会場に居て下さい。
- * ポスターセッション講演者にはオーラル講演の間に1件2分以内のショートサマリー発表の時間が与えられます。2枚以内のOHPを使って要領よくセールスポイントを伝えて下さい。

2. 会場

プレシンポジウム：千葉県立中央博物館講堂

(千葉市中央区青葉町 955-2, Tel 043-265-3111)

一般研究発表・総会・シンポジウム：国立歴史民俗博物館講堂

(千葉県佐倉市城内町 117, Tel 043-486-0123)

交通案内：次ページの地図、両博物館ホームページ掲載の利用・交通案内など参照。

- * 千葉県立中央博物館では有料駐車場(青葉の森公園 北口駐車場)が利用可能です。4時間以内300円、それ以上は600円です。17:30には駐車場は閉門になり車が出せなくなります。
- * 国立歴史民俗博物館では無料駐車場が利用可能です。17:30には閉門になり車が出せなくなります。夜間駐車は盗難などの危険があります。

懇親会：国立歴史民俗博物館大会議室

(会場の位置は研究発表会場でお知らせします)

大会連絡先：辻 誠一郎

国立歴史民俗博物館(ホームページ：<http://www.rekihaku.ac.jp>)

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町 117

Tel 043-486-0123(代表) 内線 481

Fax 043-486-4299(研究部)

e-mail tsumura@rekihaku.ac.jp (c/o, 津村宏臣, 歴博大学院生)

プレシンポジウム・巡検については：岡崎浩子

千葉県立中央博物館(ホームページ：<http://www.chiba-muse.or.jp>)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

地図 2 枚

Tel 043-265-3111 (代表), 043-265-3879 (地学研究科)
 Fax 043-266-2481
 e-mail kohiroko@chiba-muse.or.jp

大会実行委員会

委員長：辻 誠一郎 副委員長：岡崎浩子

委員：春成秀爾・今村峯雄・西本豊弘・青山宏夫・坂本 稔・津村宏臣・久保純子・
 樋泉岳二・江口誠一・奥田昌明

3. 講演要旨集

講演要旨集は会場で直接販売します。定価は2,500円です。通信販売もいたしますので購入ご希望の方は、学会事務センター（日本第四紀学会事務局）に申し込んで下さい。

〒113-8622 東京都文京区本駒込5-16-9 学会センター C-21

(財)日本学会事務センター 事業部

TEL 03-5814-5811 FAX 03-5814-5822

4. 参加費

今大会では、参加費として2,000円を徴収します。
 大会経費節約のためご協力をお願いいたします。

5. 懇親会

8月25日(金)17:30から

場所：国立歴史民俗博物館大会議室，参加費；一般：4,000円，学生：3,000円

8月24日から第四紀学会会場で受け付けます。

6. プログラム

プレシンポジウム

「房総半島の第四紀 - 地層・地形から読む海水準変動とテクトニクス」

世話人：岡崎浩子・江口誠一・奥田昌明

1日目：8月23日(水)：千葉県立中央博物館講堂

講演時間	題目・氏名	
10:00-10:05	シンポジウム趣旨説明	プレシンポ世話人会

< 200万年前～50万年前 >

PS1	10:05-10:35	21世紀の深海掘削と第四紀学 - 房総における陸海域掘削の提案 -	平 朝彦(東大海洋研)
PS2	10:35-11:05	上総層群大田代層～梅ヶ瀬層で認められた氷河性海水準変動とそのタービダイト成砂岩の堆積への影響	辻 隆司(石油資源開発)・宮田雄一郎(山口大・理)・中水 勝(石油開発情報セ)

コメント

PS3	11:05-11:25	上総層群の陸棚 - 深海底堆積物に記録された氷河性海水準変動	堀川恵司(千葉大・自然科学)・高野壮太郎(インドネシア石油)・伊藤 慎(千葉大・理)
-----	-------------	--------------------------------------	--

休憩5分 (11:25-11:30)

2000年第四紀学会大会

< 50万年前～2万年前 >

- PS4 11:30-12:00 下総層群の年代と“鹿島”隆起帯の運動 中里裕臣(農業工学研)・佐藤弘幸(静岡聖光学院)
- PS5 12:00-12:30 下総層群の堆積ダイナミクス 岡崎浩子(千葉県立中央博物館)・中里裕臣(農業工学研)・佐藤弘幸(静岡聖光学院)
- 昼食 12:30-13:30
- PS6 13:30-14:00 二枚貝類を中心とした下総層群の底生動物化石群集,特に生活様式組成と堆積作用の関係 近藤康生(高知大・理)・鎌滝孝信(東濃地科学セ)

コメント

- PS7 14:00-14:20 古東京湾の堆積システムに記録された海水準変動とテクトニクス 西川 徹・杉本英也(千葉大・自然科学)・伊藤 慎(千葉大・理)
- PS8 14:20-14:40 房総半島の地形から読む中・後期更新世の海水準とテクトニクス 菊地隆男(都立大・理)
- 休憩 5分(14:40-14:45)

< 2万年前～ >

- PS9 14:45-15:15 房総半島東京湾側の沖積層と海水準変動 斎藤文紀(地質調査所)
- コメント
- PS10 15:15-15:35 房総半島の地形形成とサイスモテクトニクス 穴倉正展・宮内崇裕(千葉大・理)
- PS11 15:35-16:05 房総半島太平洋側の沖積層と海水準変動 - 特に,九十九里浜平野と夷隅川低地の完新統 増田 富士雄(京大・理)・藤原 治(東濃地科学セ)・酒井哲弥(京大・理)
- 総合討論 16:05-16:25

シンポジウム「21世紀の年代観 - 炭素年から暦年へ」

世話人: 春成秀爾・今村峯雄・中村俊夫・辻 誠一郎

4日目: 8月26日(土): 国立歴史民俗博物館講堂

- | 講演時間 | 題目・氏名 |
|----------------------|--|
| 9:30-9:40 | シンポジウム趣旨説明 シンポジウム世話人会 |
| S1 9:40-10:10 | 放射性炭素年代とその高精度化 中村俊夫(名大・年代セ) |
| S2 10:10-10:40 | テフロクロノロジーと ¹⁴ Cクロノロジー 奥野 充(福岡大・理) |
| S3 10:40-11:10 | 生態系史の高精度編年に向けて 辻 誠一郎(国立歴博) |
| 休憩 20分 (11:10-11:30) | |

特別講演 11:30-12:30 考古学の年代 佐原 眞(国立歴博)

昼食 12:30-13:30

- S4 13:30-14:00 日本列島東北部における土器出現の¹⁴C年代・暦年代と時代区分の問題 谷口康浩(國學院大)
- S5 14:00-14:30 旧石器時代から縄文時代へ - 南九州の場合 - 児玉健一郎(鹿児島県教委)
- S6 14:30-15:00 縄文時代から弥生時代へ - 問題と展望 今村峯雄(国立歴博)

休憩 15分 (15:00-15:15)

- S7 15:15-15:45 縄文時代の高精度編年と展望 春成秀爾(国立歴博)
- S8 15:45-16:15 中部ヨーロッパにおける最終氷期～後氷期の較正年代と考古学 小野 昭(東京都立大・人文)
- 総合討論 16:15-17:15 考古学における編年と年代 司会: 岡村道雄(文化庁)

一般研究発表 オーラルセッション 2日目：8月24日(木)

No.	講演時間	題目・氏名
O1	9:30-9:42	有珠山2000年噴火の降灰 - その分布と粒度組成 - ... 長井大輔・遠藤邦彦(日大)・陶野郁雄(環境研)・鈴木正章(道都大)・山縣耕太郎(上越教育大)・千葉達朗(アジア航測)・小森次郎(都立大)・大野希一・石田大輔・国方まり・諸星真帆(日大)
O2	9:42-9:54	日本海北部,北海道西沖深海底コア中のテフラ - EDSを用いた火山ガラスの主成分化学分析 - 田中晶子(都立大)・池原 研(地調)・鈴木毅彦(都立大)
O3	9:54-10:06	テフラから見た最近45万年間の恐山火山の噴火活動史 桑原拓一郎・山崎晴雄(都立大)
O4	10:06-10:18	新庄・古川ルートにおける奥羽脊梁山脈山麓部の最終間氷期以降の垂直隆起 八木浩司(山形大)・早田 勉(古環境研)
O5	10:18-10:30	越後平野北部,古塩津(古紫雲寺)湯における表層地質 鴨井幸彦(株・興和)・安井 賢・小林巖雄(新潟大)・渡辺秀男(三島中)
O6	10:30-10:42	新潟県小千谷市におけるローム層の諸性質 - 古環境変化の記録の可能性 品川俊介(建設省土木研)・金 幸隆(京大)
O7	10:42-10:54	南関東の完新世累積性火山灰土壌における風化指標 大井隆志・坂上寛一・鈴木創三・田中治夫(東京農工大)
	10:54-11:06	コーヒープレイク
O8	11:06-11:18	信濃川流域における更新世末以降の段丘形成とブロック隆起運動 高浜信行(新潟大)・信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ
O9	11:18-11:30	信濃川流域,津南町地域における更新世末期以降の段丘編年と構造運動 渡辺秀男(三島中)・信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ
O10	11:30-11:42	信濃川流域の活断層と液状化跡 大塚富男(大塚英数学院)・信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ
O11	11:42-11:54	群馬県吾妻川上流域の中部更新統から産出した花粉化石群集 本郷美佐緒(大阪市大)・田辺智隆(戸隠村地質化石館)
O12	11:54-12:06	埼玉県中部,羽黒神社アラカシ林におけるアラカシ花粉粒生産量の推定 清水丈太(東京都都市計画)
O13	12:06-12:18	東茨城台地の後期更新世のテフラと堆積相 大井信三・山田美隆(国土地理院)
O14	12:18-12:30	房総半島北部,木更津台地におけるステージ5eの地形面とその形成環境について 佐藤俊文(木更津東高)・杉原重夫(明治大)・増淵和夫(川崎市青少年科学館)
	12:30-13:30	昼食休憩(幹事会 第1会議室)
	13:30-14:24	ポスターセッション ショートサマリー(P1-P27,各2分)
	14:24-16:00	コーヒープレイク,ポスターセッション 第2研修室
O15	16:00-16:12	関東平野西南部の鮮新 - 更新統,上総層群相当層の古生物群集(特に古脊椎動物)の産出層準について 小泉明裕(飯田市美術博物館)
O16	16:12-16:24	上宝火砕流の流下による飛騨地方の大規模な地形変化 田村糸子・山崎晴雄(都立大)
O17	16:24-16:36	静岡県清水市三保海岸の浸食の進行 佐藤 武(東海大)
O18	16:36-16:48	静岡県有度丘陵東縁の上部更新統の層序と同位体ステージ6.5の海水準変動 北村晃寿(静岡大)・富永英治(株・地層科学研)・大村明雄(金沢大)・亀尾浩司(千葉大)・尾田太良・嶽本あゆみ(熊本大)
O19	16:48-17:00	琵琶湖湖底堆積物の微粒炭分析による過去約13万年間の植物燃焼史 井上 淳(大阪市大)・高原 光(京都府大)・吉川周作(大阪市大)・井内美朗(愛媛大)
O20	17:00-17:12	三重県鳥羽市相模の湿地堆積物に見いだされた地震津波の痕跡 岡橋久世(京都大)・吉川周作・三田村宗樹(大阪市大)・兵頭政幸(神戸大)・内山 高・内山美恵子(大阪市大)
O21	17:12-17:24	紀淡海峡東縁部の完新世貝形虫群集の変遷と堆積環境 安原盛明(大阪市大)・入月俊明(愛教大)・吉川周作(大阪市大)・七山 太(地調)
	17:30-19:30	評議員会(第1会議室)

一般研究発表 オーラルセッション(続き) 3日目: 8月25日(金)

- O22 9:30-9:42 中央構造線活断層系三野断層の最新活動時期 岡田篤正(京都大)・森野道夫(応用地質)・中田 高(広島大)・村田明広(徳島大)・水野清秀(地調)・能見忠歳・谷野宮恵美・池田小織・原 郁夫(応用地質)
- O23 9:42-9:54 台湾中部, 9・21 集集地震による地震断層の特性と変位の累積性 太田陽子(横国大)・Chi-Yue HUANG (台湾大)・渡辺満久(東洋大)・鈴木康弘(愛知県大)・澤 祥(鶴岡工専)
- O24 9:54-10:06 北西太平洋で採取された海底コア MR99-K04, PC-2 及び PC-3 中の第四紀中期・後期テフラ層序 青木かおり(北大)・山本浩文(海洋科学技術セ)
- O25 10:06-10:18 閉鎖系堆積物の花粉分析からみた後氷期の斜面崩壊発生とその環境 Ji-Hoon Park(東北大)
- O26 10:18-10:30 海底の活断層(逆断層)と化学合成生物群集 - 東北日本日本海溝の三陸海底崖 藤岡換太郎(海洋科学技術セ)
- O27 10:30-10:42 淡水湖沼におけるラミナの形成条件・形成過程 - 群馬県多々良沼における事例 - 宮野義則・遠藤邦彦(日大)
- O28 10:42-10:54 大型有孔虫(Amphistegina 属)殻の形態学的解析から読みとる古水深 坂井三郎(熊本大)
- O29 10:54-11:06 黄土・古土壌における Fe_2O_3 と $CaCO_3$ の定量判別分析による古気候の推定 漆 富成・遠藤邦彦(日大)
- 11:10-12:30 日本第四紀学会 2000 年総会 国立歴史民俗博物館講堂
- 12:30-13:30 昼食休憩
- O30 13:30-13:42 石器石材の利用からみた北海道最終氷期極相期における石核素材の運用性 中沢祐一(北大)
- O31 13:42-13:54 青森平野の地形・沖積層層序と三内丸山, 大矢沢野田遺跡の古環境 久保純子(中央学院大)・辻 誠一郎(歴博)・村田泰輔(北大)・後藤香奈子・辻 圭子(歴博)
- O32 13:54-14:06 山形県新庄盆地およびその周辺地域における河成段丘面編年 - 毒沢テフラおよび ^{14}C 年代資料による検討 - 松浦旅人(東北大)
- O33 14:06-14:18 新潟県六日町の腐植土の ^{14}C 年代 関谷一義(新潟県保健環境科学研)・陶野郁雄(環境研)
- O34 14:18-14:30 埋没した年代が異なる畑土壌の化学性 須永薫子・坂上寛一(東京農工大)・石井克己(群馬県子持村教育委員会)・関 俊明(群馬県埋文調査事業団)
- O35 14:30-14:42 千葉県和田町平塚の泥炭質堆積物の年代と花粉分析 関口千穂・叶内敦子・杉原重夫(明治大)
- 14:42-16:00 コーヒーブレイク, ポスターセッション 第2研修室
- O36 16:00-16:12 中世 - 畑作害虫と貯穀性昆虫多産の意味するもの 森 勇一(明和高)・鈴木正貴・鬼頭 剛(愛知埋セ)・廣田早和子(信州大)
- O37 16:12-16:24 上淀廃寺から淀江潟が見えたのか? - 縄文時代早期末以降の鳥取県淀江平野の環境変遷 - 渡辺正巳(文化財調査コンサル株)・徳岡隆夫(島根大)・荒川賢丈(田中学習会)・中村唯史(三瓶自然館)
- O38 16:24-16:36 鹿児島県, 肝属平野の完新世後半の植生変遷 河合小百合(信大)・奥野 充(福岡大)・永迫俊郎(都立大)・中村俊夫(名大)
- O39 16:36-16:48 中部琉球喜界島に分布する最古の完新世サンゴ石灰岩に関するウラン系列年代 大村明雄・鷲見和子・佐々木圭一(金沢大)・山田芳宗(北陸大)・大場忠道(北大)
- O40 16:48-17:00 中国江蘇省朝敦頭トレンチ試料の花粉分析 奥田昌明(千葉中央博)・佐藤洋一郎(静岡大)・北川浩之(名大)・安田喜憲(日文研)
- O41 17:00-17:12 化石骨の AMS ^{14}C 年代 - XAD-2 樹脂を用いた前処理法 - 南 雅代・中村俊夫(名大)
- 17:30-20:00 懇親会(国立歴史民俗博物館大会議室)

ポスターセッション

- No. 題目・氏名
- P1 北海道十勝平野における前期～中期更新世テフラの層序と岩石学的特徴 研川英征(土佐山田町教育委員会)・中村有吾・平川一臣(北大)
- P2 北海道東部の塩性湿地群に見られた過去 3000 年間における陸化イベント 沢井祐紀(九大)
- P3 三内丸山遺跡の土壌層 - なぜ最盛期に生成した土壌が黒くないのか? - 佐瀬 隆(岩手県宮古高)・細野 衛(東京自然史研究機構)・高地セリエ好美(帯広畜産大)
- P4 東北地方中部に分布する新庄テフラの特徴と層位 北村 繁(弘前学院大)・早田 勉(株・古環境研)・八木浩司(山形大)
- P5 Tephrochronology of late Quaternary strath terraces and their implications to neotectonic movements of the Shitada-Higashiyama Hills, central east margin of the Niigata Basin, central Japan Tad James Choi, Nobuyuki Takahama and Atsushi Urabe(Niigata Univ.)
- P6 新潟地域における完新世の火山灰層序と対比 卜部厚志・高浜信行(新潟大)・塚野明美(中越運輸)・渡辺秀男(三島中)・東野外志男(白山自然保護センター)・信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ
- P7 越後平野北部古塩津潟における完新世汽水湖堆積物の特徴 安井 賢(新潟大)・大西貴文(台湾市在住)・鴨井幸彦(株・興和)・小林巖雄(新潟大)
- P8 宮城県宮戸島里浜貝塚における過去 4000 年間の環境変遷 吉川昌伸・吉川純子(古代の森研究舎)
- P9 昭島市の多摩川河床に露出する加住礫層から発見されたアケボノゾウ足跡化石とその年代・古環境 倉川 博(埼玉県飯能高)・多摩川足跡化石調査団
- P10 東京都中里貝塚における AMS 法による放射性炭素年代と暦年代 山谷文人(東京都北区教委)・樋泉岳二(早稲田大)
- P11 武蔵野台地南部における遺跡土壌の黒土層層序 建石 徹(東京芸大)・川井伸郎(株・クレアテラ)・塚原二郎・中山真治(府中市遺跡調査会)・松田隆夫(府中市教委)・坂上寛一(東京農工大)
- P12 飯能層に礫を供給した関東山地の泥質ホルンフェルスについて 加賀美英雄(城西大)・谷口英嗣(駒沢大高校)
- P13 静岡県牧ノ原台地の上部更新統の堆積過程と地形発達 後藤憲央(駒沢大)
- P14 能登半島・平床台地に発達する段丘堆積物中から見出されたテフラとその意義 嶋田一勝・立石雅昭(新潟大)
- P15 近畿地域の活断層分布について 北田奈緒子・溝上寿子(地域地盤環境研)・岡田篤正(京大)・東郷正美(法政大)
- P16 火山ガラスの主成分化学組成を用いた給源火山の同定 - 琵琶湖高島沖ボーリング火山灰の例 - 長橋良隆(福島大)・吉川周作(大阪市大)・井内美郎(愛媛大)
- P17 反射法地震探査断面の解釈に基づく大阪湾の地質構造 井上直人・川畑大作(京大)・北田奈緒子(地域地盤環境研)・竹村恵二(京大)・中川康一(大阪市大)
- P18 福岡市今津周辺の縄文時代遺跡と斜面堆積物 磯 望(西南学院大)・下山正一(九大)・池田祐司・米倉秀紀・菅波正人・荒牧宏行(福岡市教委)
- P19 志布志湾砂丘の形成と砂丘埋没遺跡 永迫俊郎(都立大)・森脇 広(鹿児島大)・内村憲和(大崎町教委)・中村耕治(鹿児島県埋文セ)・新井房夫(群馬大)
- P20 10 万～2.7 万年前の始良カルデラ火山のテフロクロノロジーと古地理 長岡信治(長崎大)・奥野 充(福岡大)・新井房夫(群馬大)
- P21 日本における最終間氷期のサルスベリ属の花粉 藤木利之(日文研)・百原 新(千葉大)・安田喜憲(日文研)
- P22 ボーリングコア解析にもとづく韓半島東海岸, 花津浦・松池湖における完新世堆積環境変遷 竹村恵二(京大)・Yum, Jong-Gwon・Yu, Kang-Min・Kim Ill Soo(Yonsei Univ.)・成瀬敏郎(兵庫教育大)・伊藤康人(大阪府大)・林田 明(同志社大)・金 幸隆(京大)・松岡数充(長崎大)・北川浩之(名大)

- P23 フィリピン、ラロ貝塚群遺跡の¹⁴Cクロノロジーとその意義 三原正三(九大)・奥野 充
(福岡大)・小川英文(東京外語大)・田中和彦(千葉敬愛短大)・中村俊夫(名大)・小池裕子(九大)
- P24 ネパール中南部, ヒマラヤ前縁帯活断層の変位地形と活動履歴 熊原康博・中田 高(広島大)・朝日克彦・D.Chamlagain・B.N.Upreti(Tribhuvan Univ.)
- P25 レス古土壌堆積物の蛍光X線分析による化学組成変化を用いた新しいレス層序の確立
..... 山田和芳(都立大)・尹 懷寧(遼寧師範大)・福澤仁之(都立大)・鳥居雅之(岡山理大)
- P26 浅海成堆積物を利用した地殻上下動復元手法の意義 白井正明(電中研)
- P27 地理情報システムを用いた海水準変動のシミュレーションと評価 津村宏臣(総合研究大学院大)
- p28 Introduction of ¹⁴C dating in Paleo Labo
..... Z. Lomtadze, I. Zhorzholiani and H. Yamagata (Paleo Labo Co., Ltd)

大会特別価格ブックセール

大会期間中の8月24日(木)~26日(土)に第四紀研究のバックナンバーと第四紀露頭集の特別販売を行います。1991年までの旧表装の第四紀研究(各500円,特集号1000円),1992-1998年の新表装(各1000円,特集号2000円),講演要旨集(各500円),第四紀露頭集-日本のテフラは1000円です。大会会場特別価格のため,特別価格での通信販売は行いません。

学会からのお知らせ(委任状のお願い)

総会に出席できない方は委任状を下記幹事長あてお送り下さい。
コピー(官製はがきに貼付でも可)または同様の文面でも結構です。

送付先: 斎藤文紀 地質調査所海洋地質部
305-8567 つくば市東 1-1-3
Tel:0298-54-3772 Fax:0298-54-3589
e-mail: yoshi@gsj.go.jp

委 任 状

2000年 月 日

日本第四紀学会会長殿

氏名 _____

所属 _____

私は議長(または _____ 氏)を代理人と定め,2000年度日本第四紀学会総会における一切の議決権を委任します。

テフラ研究委員会からのお知らせ

日本第四紀学会テフラ研究委員会では、2000年の活動として次のようなシンポジウムの開催と野外巡検を企画しました。ふるってご参加下さい。一方のみの参加、両方への参加、ともに歓迎いたします。

<シンポジウム> 明日のテフラ（火山灰）研究を考える—火山からのメッセージを解読する—

日時：2000年10月6日（金）午前9:30～午後16:30
 場所：日本学術会議大講堂 地下鉄千代田線乃木坂下車1分
 オーガナイザー：町田 洋・吉川周作・鈴木毅彦
 主催：第四紀研究連絡委員会・日本第四紀学会テフラ研究委員会

趣旨：テフラ（火山灰）研究は、その成立の当初から火山学、地質学、古生物学、考古学、土壌学、地形学、年代学などきわめて多くの研究分野と深く関わって発展してきた。この学際性のために、既存の学会活動と並行して、これまでしばしば各分野の最新の成果をもちより討議する機会をもってきた。今世紀にテフラ研究によってもたらされた知見は数限りないが、新世紀を迎えようとするこの時期に、これまでの研究を総括し、新たな展望を開くことは、すべての関係者が共有する願いであるに違いない。このような意図から、最新の研究成果を披露するとともに、新しいアイデアを自由に語り合う機会として、このシンポジウムを企画した。テフラに関心をもつ多数の方の参加をお待ちする。

シンポジウムでオーガナイザーはすでに何人かの key note speaker を予定しておりますが、一般にもひろく表題に関わる話題提供を募集いたします。テフラをめぐる同定・年代測定などの手法、テフラ層序、火山学、古環境の復元、考古学など多岐にわたるテーマをお待ちしています。

講演希望者は下記の問い合わせ先までご連絡下さい（7月31日締切）。
 参加無料。事前登録は必要ありません。直接会場においで下さい。

問い合わせ先：鈴木毅彦 東京都立大学大学院理学研究科地理学教室
 TEL：0426-77-2594 FAX：0426-77-2589 e-mail：suzukit@comp.metro-u.ac.jp

<野外巡検> 第8回テフラ研究委員会野外巡検：東北南部のテフロクロノロジー

日時：2000年10月7日（土）～10月9日（月）（泊3日）
 場所：福島県中通り（那須、白河、阿武隈、安達太良火山）～宮城県北部（岩出山丘陵、鬼首カルデラ）
 巡検テーマ：東北南部のテフロクロノロジー
 —火山フロント沿いの成層火山・大規模火砕流・前期旧石器編年問題—

およそのコース：

10/7：都内および新白河駅集合—那須山麓—白河丘陵—阿武隈山地—安達太良山麓岳温泉（泊）
 10/8：安達太良山麓—岩出山丘陵—鳴子温泉（泊）
 10/9：鳴子温泉—鬼首カルデラ—解散：JR古川駅—都内（詳しい集合解散場所は未定）

案内者：鈴木毅彦・早田 勉・八木浩司
 連絡先：鈴木毅彦（上記）
 参加費：約35,000円（宿泊費、バス代、昼食代込み 最後に精算します）
 申込：締切り日：7月31日

都立大・鈴木毅彦（連絡先上記）まで、下記の事項を付記して7月31日までにお申込み下さい。
 申し込みと同時に申込金10,000円をお支払い下さい。

振込先は、郵便振替口座：00190-0-720271 名義：鈴木毅彦
 人数超過が予想されますのでお申し込みはお早めをお願いいたします。
 先着順で40名のお申し込みを受け付ける予定です。

申し込み後8/10までにキャンセルされる場合は申込金を返却します。
 参加人数が規定に達しない場合、中止することがあります。
 8月中旬に参加予定者には最終案内を差し上げます。

アジア太平洋層序研究委員会からのお知らせ

第四紀学会の INQUA の Commission に対応する国内委員会のひとつであるアジア太平洋層序研究委員会では、下記のように第四紀総合研究会と共催で巡検とシンポジウムを開催することにしました。シンポジウムは八ヶ岳団体研究グループの成果を中心に中部更新統の層序や古環境変遷について話題提供および討論することになっています。関連する発表も受け付けます。発表を考えておられる方や巡検参加希望者は下記の研究委員会代表まで申し込んでください。お申し込みいただいた方には、9月中旬に詳しい内容やプログラムを送ります。

記

日程：10月7日(土)夕方、長野県下諏訪町集合
10月8日(日)シンポジウム「八ヶ岳山麓の第四系 - 長期の火山活動を湖成層から読む -」
10月9日(祝)巡検、八ヶ岳西麓 - 大石峠 - 八千穂村池の平遺跡 - 東麓の中部更新統 - 野辺山駅解散(15:00頃)

費用：全日程参加の場合は約 20,000 円

申込先：第四紀学会「アジア太平洋第四紀層序研究委員会」

連絡先：〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138 大阪市立大学理学部地球学教室 熊井久雄
電話：06-605-2589 FAX：06-605-2522 e-mail：kumai@sci.osaka-cu.ac.jp

INQUA 日本大会誘致の検討に関するワーキンググループからの報告とお願い

第四紀研究連絡委員会 INQUA 招致に関する検討ワーキンググループ

ワーキンググループ組織の経緯

第四紀研究の最新号(37巻,2号)でご承知のように、国際第四紀学連合(INQUA)の第15回大会は1999年に南アフリカのダーバンで行われました。また次回の大会は2003年にアメリカ合衆国西岸ネバダで行われます。過去15回の大会場所は、1973年のニュージーランド、1999年の南アフリカ、そしてアジアでは1991年の中国であって、そのほかすべては北アメリカおよびヨーロッパで行われています。INQUAの成立の歴史を考えればこのことは当然かもしれませんが、しかし、あまりにもヨーロッパと北アメリカに集中していると思われます。

我が国では、日本学術会議に第四紀研究連絡委員会がおかれ、INQUAとの正式な対応機関となっています。そしてINQUAへの分担金が国費でまかなわれておりますが、その額は、最高カテゴリーの12600スイスフランという高額なもので、INQUA予算の約10%を占めており、INQUAの運営に重要な位置を占めております。また、大会への日本人参加者数はつねに上位5か国に入っており、発表も多く行われています。

しかし、INQUAにおける日本の占める役割は実は大きいものではありません。たとえば、過去には執行部で日本人が選出されたことはなく、1995年に初めて太田陽子が副委員長に選出されました。たくさんの研究委員会で日本人が委員長になった例はきわめて少なく、1999年では委員会の副委員長1、書記1、部会の委員長2というポストをもっているにすぎません。学術会議側からは、しばしば研究連絡委員会が対応国際機関にどの程度の役割を持っているかが問われています。たとえば、最近でも、執行部に日本人の占める比率、諸種委員会に日本人の占める比率、過去に国際的な大会を開いたか、または開く予定があるか、国際対応を密にするのにどのような計画があるかなどの調査がありました。

もちろん、今までも第四紀研究連絡委員会はそれなりの努力をしてきました。大会の際には日本としての展示を出品する、「第四紀研究」の英文特集号を発行し、主要な参加者に配布する、上記のように執行部または研究委員会に日本人役員を送る、などの努力はしてきました。しかし、なかなか日本の顔が表にでてきません。また、INQUAへの参加者が多いとはいえ、参加できる人の数には限りがあります。日本で大会を実施すれば、より多くの第四紀研究者が直接国際的活動の場にふれ、発表や研究討議の機会がふえるはずであり、さらに会議や巡検を通して海外の研究者とのより密な交流をする機会ともなるでしょう。大会を実施すれば、経済的にも、時間的にも負担が大きいのは確かです。しかし、いままでの会議はすべてほかの国の同じような努力によって開催されていたわけで、私たちはほかの人の努力によって運営された大会に参加していただけです。日本だけがこれを大変だから、と避けるのは筋が通らないのではないのでしょうか。

このような情勢を考えて、INQUA大会の日本招致が望ましいのではないかという機運が高まってきました。過去にも一度このことが議論されましたが、当時は財政的裏付けに欠けるというので見送りになりました。17期の第四紀研究連絡委員会では、上記のような事情を考慮して、改めてINQUA招致検討のためのワーキンググループを組織いたしました。研究連絡委員会からの5名、日本第四紀学会からの4名が委員となり、数回委員会を開き、さらに8月に委員会を開くことになっております。ここに、従来の経緯と、おもな検討結果をご報告し、この問題に関するご理解とご意見をいただきたいと考えております。

検討内容

1. 日本招致に関する必要性などについて討議した(経緯参照)。基本的には招致の方向で検討をする。もちろん、このグループの討議内容を多くの関係者に周知を計り、協力を依頼するための基本的検討をはじめめる。
2. 過去数回のINQUA大会の規模、テーマなどに関する資料を集めた。おおむね参加者数は600名～1000名。大会時には総会などのための大会場1と、各テーマごとの発表会場を10程度、ポスター会場を必要とする。もちろん各会場にはOA機器が備えられ、事務局などの十分な組織を必要とする。会議前、および会議後のそれぞれ1週間程度の巡検(近隣諸国との協力を願うことも考える)、大会期間中の日帰り巡検などが必要である。
3. 上記の規模で実施し、しかも第四紀研究者が比較的集中する地域を検討した。その結果、札幌、つくば、東京、京阪神などの地区が候補にのぼった。
4. 最近実施予定の国際会議(国際地形学会、国際古海洋学会議)などに関する資料を集めた。
5. もっとも問題となる資金については、最近国際コンベンション誘致センターと連絡をとった結果、多くの都道府県に助成金、準備のためには無利子の貸付金などの制度があることがわかった。これらと登録費、国からの補助などの可能性を考えると、資金的には絶対不可能ということではなさそうであるとの感触を得た。もちろん、経済的、時間的にボランティアとしての活動は必要である。
6. 上記5にあげた地域の会議場の規模、借用費などについて同条件での見積もりが得られた。会場費のみでは、最低500万円程度から最大1300万円と大きな差がある。国際コンベンション誘致センターでは、我々の委員会のために、委員会会場を提供し、上記各地区の会議場責任者を集め、各会議場に関する紹介、我々からの質疑に応じる機会を提供してくれることになった。この会は8月22日の午後行われる。
7. 日本で実施される場合のメインテーマについて検討中。
8. 大会実施にあたってINQUA当局から経費の補助があるかどうか、また総会の際のプレナリレクチュア発表者に経費の補助があるかどうかは今後問い合わせる。

今後の問題と体制

ワーキンググループの検討は最近になってやっと具体化してきました。もし招致するとすれば2002年までに意思表示をする必要があります。現段階では、1999年の執行委員会の席上で、太田が「日本での開催の可能性を検討し始めた」ということを発言しました。現在のところまだほかの国からの意思表示はないようです。

ワーキンググループとしては、次期にもこの委員会を継続させることを次期第四紀研究連絡委員会および日本第四紀学会に申し入れることを決定いたしました。現在の委員は太田陽子(委員長)、小野昭、小野有五、小池裕子、町田 洋(以上研連から)、熊井久雄、斉藤文紀、平川一臣、米倉伸之(以上学会から)の9名です。この段階では、問題の性質上、INQUAに多く出席して実状を知っていると思われる人に加えて年齢層を多少考慮した編成になっております。次期ではこれらの条件に加えてより若い方にも加わっていただけるように考えております。よく、「企画をするのは古い年代で、後の仕事で大変なのは若い人々である」という意見もききます。しかし、このようにならないようにこれから機会を見つけては討論結果をご紹介し、また企画の中に入っただけのような体制を考えてゆきます。委員会としては、もちろんいろいろな問題に対する慎重な検討をするとともに、「こういう困難さがあるから撤退する」というのではなく、「どうすれば困難さを克服できるか」という方向で、前向きに取り組んでいきたいと考えます。第四紀学会のおりにもご報告するとともに、適当な機会に公聴会を開き、多くの第四紀学会会員の声を伺いたいと考えています。ご意見があればぜひお聞かせください。

ワーキンググループ委員一同(文責 太田陽子)

自然史学会連合各学協会からのお知らせ

自然史学会連合各学協会では、下記のシンポジウム開催を予定しています。是非、ご参集下さい。

タイトル：「21世紀の自然史科学における画像データベース」

日時：2000年10月14日(土)13時から17時

場所：国立科学博物館新宿分館・研修研究館・4階講堂

講演プログラム

- 13:10 生物分類学における広域分散型画像データベースの重要性と問題点：今井弘民(国立遺伝学研究所)
- 13:40 哺乳類頭骨画像データベース：茂原信生(京都大学霊長類研究所)・山田 格(国立科学博物館)
- 14:10 牧野標本館所蔵タイプ標本画像データベース：加藤英寿(東京都立大学牧野標本館)
- 14:40 インターネットを活用した生きもの調査：岩淵成紀(仙台市科学館)
- 15:10 画像データベースの維持管理システム：鶴川義弘(宮城教育大学)
- 15:40 休息
- 16:10 総合討論

画像データベース展示・実演

哺乳類頭骨画像データベース：茂原信生(京都大学霊長類研究所)・高橋秀雄(獨協医科大学)・山下真幸(獨協医科大学)・山田 格(国立科学博物館)

国際協力によるアリ類画像データベース：今井弘民(国立遺伝学研究所)・鶴川義弘(宮城教育大学)・久保田政雄(日本蟻類研究会)・R. W. Taylor (CSIRO, Australia)

牧野標本館所蔵タイプ標本データベース：加藤英寿(東京都立大学牧野標本館)・木原 章(法政大学)
インターネットを活用した生きもの調査：岩淵成紀(仙台市科学館)・鶴川義弘(宮城教育大学)
これ以外に、国立科学博物館の衛星放送番組を予定しています。

主催：自然史学会連合、共催：日本哺乳類学会、後援：国立科学博物館

参加申し込みは不要です。途中からでも自由にご参加ください。

お問い合わせ先

自然史学会連合事務局 遠藤秀紀、篠原現人、加瀬友喜

〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部動物第一研究室

tel. 03-3364-2311, 03-3364-7127 fax. 03-3364-7104 E-mail:endo@kahaku.go.jp

国際シンポジウム

「ロディニア、 Gondwana 超大陸の形成・分裂とアジア大陸の成長」のお知らせ

かつて地球上の殆どすべての大陸が集まっていたとされる巨大大陸ロディニア(10億年前)、Gondwana(5億年前)という2つの超大陸の形成・分裂事件と、それに引き続くアジア大陸の成長過程は、現在の地球科学の重要な研究課題です。さらに、これらの大規模地殻変遷の過程に伴う地球表層環境の巨大変動が注目されています。

本シンポジウムのメインテーマは、アジア大陸の成長、アジア大陸構成陸片の起源、その起源大陸としてのロディニアおよびGondwana超大陸の形成過程と分裂過程です。アジアの中生代、新生代堆積盆地および関連の地質過程も、アジア大陸成長の最近の地質過程として重要です。一方、最近の人類の生産活動は、とくに開発途上国に環境破壊をもたらしつつあります。これは現在のアジアをはじめとするGondwana陸片諸国に共通する深刻な問題であり、本シンポジウムでは、独立の分科会を構成します。さらに本シンポジウムでは、世界の第一線の科学者らによる市民公開講座「地球環境の超長期変動と人類紀」も行う予定です。同時通訳により、最先端の成果を市民の皆さんと共有したいと思えます。多くの方々の御参加をお待ちしています。

日程：2001年10月26日(金)～30日(火)

会場：大阪市立大学

主催：大阪市立大学、IGCP-368、IGCP-411、IGCP-440

参加登録などの詳細は、公式ホームページ <http://www.sci.osaka-cu.ac.jp/geos/English/symposium.html> をご覧下さい。また、First & Second Circular は、以下の連絡先までお申し込みください。

連絡先：ISRGA 事務局 〒558-8585 大阪市住吉区杉本3丁目3-138 大阪市立大学理学部

Tel: 06-6605-3184 Fax: 06-6605-2604 E-mail: symp2001@sci.osaka-cu.ac.jp

地質科学関連学協会連合設立のお知らせ

日本第四紀学会では、かねてから設立に向けて準備が進められてきた地質科学関連学協会連合に対して積極的に参加する意思を表明してきました。同連合の目的は、地質科学の発展や地質科学者の社会的責任を果たす活動の促進などにあります。この度、3月27日に発足するに至りましたので、本連合に関する主旨ならびに組織・活動についてお知らせします。

<地質科学関連学協会連合設立の主旨>

近年、地球とその歴史に対する人々の知的関心が非常に高まっている。また、人類の将来を左右する緊急の課題であるエネルギーおよび地下資源の確保、環境保全、地域開発、自然災害の予測と防止など、地質科学が担うべき課題は多い。地質科学は、自然物や自然現象を対象とし、その情報を長大な時間軸上で扱うという方法論上の独自性をもっている。地質科学が蓄積してきた地球に関する知識と技術が正当に評価され、広く利用されることは社会にとってきわめて重要である。

地質科学の重要性が学術的にも社会的にも著しく増しているにも係わらず、現状はそれが正当に評価されているとは言えず、小中高校や大学での地質科学の教育も次第に縮小の傾向にあり、地質科学を支える基盤はきわめて脆弱になりつつあると言わなくてはならない。いっぽう、このような状況に対し、地質科学関連学協会等からの働きかけも、これまで十分であったとはいえない。

我々は、各学協会それぞれの学術的活動に加え、力を合わせて地質科学の発展に資する活動、地質科学者の社会的責任を果たす活動を進めるため、ここに関連学協会の連合を結成する。この連合体が参加学協会の間を繋ぎ、情報・意見を交換し、その力を結集する組織として活動することを期する。

2000年3月27日

資源地質学会 地学団体研究会 東京地学協会 日本応用地質学会 日本岩石鉱物鉱床学会 日本鉱物学会 日本古生物学会 日本情報地質学会 日本第四紀学会 日本地下水学会 日本地学教育学会 日本地形学連合 日本地質学会 日本地熱学会 日本粘土学会（五十音順、15学会）

地質科学関連学協会連合の組織と活動について

2000年3月27日
地質科学関連学協会連合

この学協会連合の結成に当たり、当初、我々は連合規約案を成文化することをやめ、以下のよう組織と活動の輪郭を描くにとどめ、規約は、設立後に参加学協会の合議によって定めることとした。

「組織」

この連合は、地質科学とそれに関連する分野の学協会（学術研究団体）によって構成する連合体である。参加・脱退は各学協会の自由意志とする。

「活動」

連合は地質科学の視点から社会への貢献を目指し、情報の交換、地質科学の基盤を強固にするための社会的活動、地質科学教育振興のための活動、これらについて関係各方面への働きかけなどを行う。また多くの学協会に共通する学術的課題について、あるいは地質科学の普及と振興を目的として、シンポジウムや講演会などを開催する。

「運営」

運営形態や運営規約は、連合発足後に討議する。当面は、幹事役に当たる複数の学協会を選出し、その学協会が中心となって規約の提案と連合のスタート時の運営を行う。連合の運営に関して、上記の活動方針以上に具体的に定めることをせず、課題ごとに参加学協会の意見を徴して行動する。

以上

林原フォーラム「地球温暖化と水」

平成 12 年 9 月 7 日・8 日・9 日
岡山国際交流センター（新幹線岡山駅前）

岡山にある林原財団では、毎年、さまざまなテーマでのフォーラムを開催していますが、今年は「地球温暖化と水」というテーマで、IGBP-PAGES(Past Global Changes)の研究に関わるフォーラムを開催する予定です。とくに日本、東アジア、オセアニアをとる PEP II(Pole-Equator-Pole)のトランセクト上で、南北両半球でも気候変化の同時性や、北米ー南米をとる PEP I, ヨーロッパからアフリカをとる PEP IIIとの気候変化の相互比較(とくに ENSO など)が大きなテーマになっています。PEP II 計画では現在、これまでの研究結果をまとめて Synthesis を書こうとしており、このフォーラムの 2 日目、3 日目はそのためのワークショップもかねています。PAGES が進めてきた高精度での分析による最終氷期・完新世の気候・環境変化復元の成果を知るうえでよい機会だと思いますので、関心ある会員のご参加を期待しております。なお最終日、9 日午後にはマサチューセッツ大学の Bradley 教授による一般向け講演(通訳つき)「地球の温暖化は氷期の引き金を引くか」が行われます。

*HAYASHIBARA FORUM "Water and Global Changes" and PAGES-PEP II
Synthesis Writing Workshop in Okayama, 6-9 September, 2000*

Schedule:

6 September, 2000: evening--arrival at Okayama

7 September, 2000: Hyayashibara Forum session 1 (9:00-10:15)

Opening remarks: Yugo Ono

Key note:

Ray Bradley: Holocene climatic changes: overview and PAGES Synthesis works

Comments:

Takehiko MIKAMI(Tokyo Metropolitan Univ.): Holocene climatic variance in PEP II transect
Presentations (titles are tentative)

1: ENSO in PEP II (10:30-12:30)

Julia Cole (Arizona Univ.):

Does the 20th century ENSO record not present a natural climatic fluctuation ?

Yoichi TANIMOTO (Hokkaido Univ./CLIVAR): Decadal scale climatic changes

Vera Markgraf (PAGES Office): ENSO viewed from Inter-PEP

Eiji MATSUMOTO (Nagoya Univ): ENSO in PEP II transect

2: Monsoon changes in Indian-Himalaya transect (14:00-16:00)

Meloth Thamban (Goa Univ.): Monsoon Changes from Arabian sea data

Jonathan Overpeck (Arizona Univ):

Century to Millenium-scale Variations in the SW Asian Monsoon

Tetsuzo YASUNARI (Tsukuba Univ./CLIVAR):

Teleconnection between monsoon fluctuation and North Atlantic circulation

Singvhi A.K.(Physical Res.Lab.Ahmedabad): Paleomonsoon changes in Indian-Himalaya transect

3: Monsoon changes in East Asia-Australian transect (16:30-18:30)

Guo Zhengtang (Chinese Science Academy): Asian monsoon changes viewed from loess-paleosol

sequence in China

Hiroyuki KITAGAWA(Nagoya Univ): High resolution- Monsoon changes viewed from lake sediments in Japan

Patrick de Dekker (Australian Nat.Univ): Linkage of monsoon system changes viewed from ocean and dust records around Australia

Yoshio INOUCHI (Ehime Univ): East Asian monsoon changes viewed from lake sediments through Baikal to Japanese lakes

Banquet 19:00-21:00

8 September, 2000:

PEP II Synthesis writing workshop (9:00-12:30)

Keynote:

Vera Markgraf (PAGES Office): What is synthesis ? an experience from PEP I

An Zhiesheng (Xian Loess Lab.):

Tentative synthesis of the linkage of East Asian and Australian paleomonsoon

Comments:

Xiao Jule (Chinese Academy of Science): Synthesis from lake and loess data from China

Jonathan Overpeck (Arizona Univ):

The Role of Mineral Dust In Climate Change Over the Last Glacial Cycle

Wang Pinxian (Shanghai Univ):Role of marginal sea changes and warm pool

Comments:

Arthor Chen(National Sun Yat-Sen Univ.) Synthesis from lake and coral data around Taiwan

John Dodson(Univ.of Western Australia): Towards a PEP II synthesis

Separate session discussion for synthesis writing (14:00-17:00)

Stream 1:

Synchrony and asynchrony of Holocene climatic changes especially in 2ka in PEP II transect.

Bradley, Markgraf, Mikami, Matsumoto, Kayane, J.Cole, Tanimoto, Kawahata,

Dodson, van der Kaas, Sugita, Arther Chen

Stream 2:

Synchrony and asynchrony of YD, D-O cycles and other climatic signals in 150ka in PEP II transect.

Singhvi, Guo, An, Wang, Xiao, Overpeck, Tada, Yasunari, Kitoh, Kitagawa, deDekker,

Thamban, Ono

9 September, 2000

Separate session continued (9:00-16:30)

Hayashibara Forum: conference for public (13:30-16:00)

Bradley's conference: Could a global warming trigger a coming of new ice age ?

Plenary session for synthesis writing (17:00-19:00)

Decision of agenda to write a synthesis paper

問い合わせ先 :

小野 有五 yugo@ees.hokudai.ac.jp

060-0810 札幌市北区北10条西5丁目

北海道大学大学院地球環境科学研究科地球生態学講座

TEL011-706-2220 FAX011-706-4866

カルスト・フェスティバル 2000 苅田

日本洞窟学会と福岡県苅田町は「カルストと人の共生」をテーマに、日本を代表するカルスト台地・平尾台において、2000年4月から10月までの半年間にわたって、『カルスト・フェスティバル2000苅田』としてカルストの自然と文化についての行事を開催します。

特にフェスティバルのコア期間として、8月25日～27日に日本洞窟学会第26回大会<苅田町大会>を開催します。この機会に、多くの方にカルストや洞窟の素晴らしい自然と文化に触れて理解を深めていただくようお願いいたします。

この記事は洞窟学会大会(コア期間)の概要を抜粋してお知らせします。内容の詳細、注意事項などは、日本洞窟学会ホームページに掲載していますので、必ずご参照のうえお申し込みください。

〒800-0352 福岡県京都郡苅田町富久町1-19-1
 苅田町生涯学習課文化係 カルスト・フェスティバル2000苅田 実行委員会事務局
 Tel:093-434-1982 Fax:093-436-3014
 Email:speleo@netlaputa.ne.jp (大会事務局)
 日本洞窟学会ホームページ
<http://www.NetLaputa.ne.jp/~ssj/index.html>

1. 期日 2000年4月16日(日)～10月15日(日)
 プレ巡検 8月20日(日)～24日(木)
 コア期間 8月25日(金)～27日(日)
 日本洞窟学会第26回大会<苅田町大会>

2. 開催概要

開催地：福岡県苅田町(かんだまち)、平尾台
 主催：日本洞窟学会、苅田町
 後援：学校法人戸早(とはや)学園ほか
 会場：学校法人戸早学園
 (北九州保育福祉専門学校・附属苅田幼稚園)
 福岡県京都郡苅田町上片島1575
 Tel:0930-24-6636 Fax:0930-24-8045
 苅田町立中央公民館
 福岡県京都郡苅田町京町2丁目5
 Tel:093-436-0061/0456 Fax:093-434-0456

運営組織：カルスト・フェスティバル2000苅田
 実行委員会 会長 伊塚工(苅田町長)
 副会長 吉村和久(日本洞窟学会会長)

3. 大会日程(コア期間)

- 1日目 8月25日(金)
 10:00-12:00 受付(ポスターセッション・写真コンテスト展示) 13:00-13:30 開会式
 13:30-16:30 招待講演会
 16:30-18:00 大会巡検オリエンテーション
 19:00-21:00 総会
 19:00- 立体スライドショー
 21:00- ミニシンポジウム
 2日目 8月26日(土)
 9:00-16:00 大会巡検
 18:00-20:30 懇親会
 3日目 8月27日(日)
 9:00-10:30 委員会

- 9:00-10:30 立体スライドショー
 10:30-11:30 ポスターセッションのコアタイム
 13:00-16:00 公開シンポジウム
 16:00-16:30 閉会式

4. 大会行事概要

(1) 招待講演会

日程：2000年8月25日(金) 13:30-16:30

会場：苅田町立中央公民館

演題：『中国のカルスト』

講演者：袁道先(Yuan Daoxian)教授
 (中国科学院 岩溶地質研究所, 中国)

演題：『世界の洞窟<スライド・ショー>』

講演者：アン・ボステッド(Ann Bosted)氏
 (洞窟写真家, アメリカ洞窟学会, アメリカ)

演題：『韓国, 幻仙窟(ハンソングル)の開発』

講演者：キム・チョルス(金吉吉寿)氏
 (韓国洞窟環境学会, 韓国)

(2) 公開シンポジウム

『21世紀の人と自然の共生をめざして
 - 平尾台カルスト青龍窟の自然と文化 - 』

日程：2000年8月27日(日) 13:00-16:00

会場：苅田町立中央公民館パネリスト：

地球化学：吉村和久(九州大学) 地質学・地形学：
 浦田健作(東京都立大学) 考古学：橋昌信(別府大学)
 文化人類学：長嶺正秀(苅田町教育委員会) 古生物学：河村善也(愛知教育大学)

(3) ミニシンポジウム

『アジア最高所級海拔2,000m以上の溶岩洞窟』

日程：2000年8月25日(金)21:00-

会場：戸早学園

代表者：本多力(富士山火山洞窟学研究会)

(4) 立体スライドショー

日程：2000年8月25日(金)19:00-
 27日(日)9:00-10:30

会場：戸早学園

(5) 大会巡検

洞窟学分野と探検技術・ケイビング分野の一日巡検・講習会を平尾台で開催します。

日程：2000年8月26日(土) 9:00-16:00

会場：平尾台, 戸早学園

(6) 学術講演会(ポスターセッション)

日本洞窟学会員は学術講演会で発表することができます。学術講演会はポスターセッションのみをおこないません。ポスターは会場に3日間展示し、8月27日(日)10:30-11:30のコアタイムにポスターの前で説明していただきます。内容は学術研究に限らず、探検技術、測図や写真など洞窟調査の成果を発表してください。締切を延長しましたのでまだ間に合います。多くの発表をお待ちしています。

発表申込締切：2000年6月20日

発表要旨締切：2000年7月15日

申込方法：日本洞窟学会のホームページをご参

照ください。

(7) 洞窟写真コンテスト

大会期間中に会場で洞窟写真コンテストをおこないます。大会会場に3日間展示し、参加者の投票で優秀写真を表彰します。募集要項は日本洞窟学会ホームページをご参照ください。

(8) 一般公開行事

以下の行事は一般に公開します。参加は無料ですが、資料費(300円程度)をいただきます。大会参加者は参加費に含まれています。

・招待講演会 8月25日(金) 13:30-16:30 苅田町立中央公民館

・公開シンポジウム 8月27日(日) 13:00-16:00

苅田町立中央公民館・戸早学園会場展示 8月26日(土) 9:00-16:00, 27日(日) 9:00-11:30

5. プレ巡検

大会前に、一日では終わらない分野の講習・巡検とファンケイピングを行ないます。各巡検の内容詳細、参加費などは日本洞窟学会ホームページをご参照ください。

日程：8月20日(日)夜 - 24日(木)

6. 宿泊・食事・交通

宿泊：参加者は大会会場の戸早学園を教室等を宿泊所として利用することができます(無料)。希望者には近隣の宿泊施設を紹介します。日本洞窟学会ホームページにリストを掲載しています。

食事：戸早学園宿泊者の食事については、学園食堂が営業します(有料)。大会巡検には弁当を用意します。

交通：JR 苅田駅(日豊線)から大会会場まで送迎バスを運行します。会場周辺の交通案内図、会場位置図を日本洞窟学会ホームページに掲載しています。

7. 参加費・申込方法

日本洞窟学会ホームページに掲載している申込書に記入して、実行委員会事務局まで郵送またはFAX

で申し込んでください。参加費は郵便振替で送金してください。

郵便振替口座番号：01790-5-94406

口座名称：カルストフェスティバル 2000 苅田

締切：8月15日(7月15日までの申し込みは参加費の早期割引があります) 締切期日以降は当日会場で申し込みをしてください。

参加費：日本洞窟学会ホームページをご参照ください。

8. カルスト・フェスティバル2000苅田 イベント・カレンダー 10月までのカルスト・フェスティバル期間内に、苅田町で以下のような行事を開催します。詳しい内容・参加方法などについては、実行委員会事務局までお問い合わせください。

6月17日(土) 講演会「平尾台カルストの洞窟と地下水」浦田健作(東京都立大学)苅田町立西部公民館・かんだ郷土史研究会共催)西部公民館大ホール

7月21日(金)～27日(木) 写真展「平尾台の自然」(苅田町・平尾台の自然を考える会共催)西部公民館大ホール

7月23日(日) 初心者のための洞窟探検<青龍窟>(第3回)(苅田町主催)一般、小学生対象

8月2日(水)～6日(日) 写真展「広谷湿原の植物」(苅田町・平尾台の植物友の会共催)苅田町立図書館ロビー

8月18日(金)～9月17日(日) 写真展「世界の洞窟」(苅田町主催)ポステッド夫妻提供 三原文化会館大ホール

8月18日(金)～11月19日(日) 特別展「豊前地方出土縄文の美といのり」苅田町教育委員会主催)苅田町歴史資料館

8月20日(日)～24日(木) プレ巡検 (日本洞窟学会主催) 8月25日(金)～27日(日) 日本洞窟学会第26回大会<苅田町大会> 苅田町白川地区村おこし祭り(苅田町主催) 10月15日(日) 平尾台自然観察会<植物観察ハイキング>(苅田町・平尾台の自然を考える会共催)

東海地震 防災セミナー 2000 [第17回]のお知らせ

昭和59年以来、毎年静岡市で開いてきましたが、本年も下記のとおり開催致します。関心をお持ちの方々のご参加を期待します。

日時：平成12年11月15日(水)13:30 - 16:00

会場：静岡商工会議所会館5階ホール(JR静岡駅北口西側)

テーマ：東海地震防災への新たな取り組み

座長：静岡大学名誉教授 土 隆一

1. 外国の津波とその災害の教訓 秋田大学工学資源学部助教授・工博 松富 英夫
2. 東海地震による津波への備え - 新しくなった津波対策強化手法と新津波予報とに照らして - 東北大学名誉教授・岩手県立大学教授・工博 首藤 伸夫

主催：東海地震防災研究会

連絡先：〒422-8035 静岡市宮竹1-9-24 土研究事務所 土 隆一

Tel.:054-238-3240 Fax:054-238-3241

第17期日本学術会議古生物学研究連絡委員会
第9回議事録

日時：2000年6月16日（金）13:30～17:00
 場所：日本学術会議 第5部会議室（603号室）
 出席：齋藤常正会員，池谷仙之委員長，井本伸広，小泉格，棚部一成，野田浩司，長谷川善和，西田治文，瀬戸口烈司，平野弘道，小笠原憲四郎（書記）
 欠席：高橋正征 委員
 学術課：鈴木事務官

1. 前回議事録の確認

審議に先立ち前回の議事録を確認した。

報告事項

1. 学術会議報告（齋藤会員）

17期学術会議は2000年6月6日～8日に開催された連合部会，部会，総会をもって任期を満了した。第18期学術会議はあらたに選出された会員により7月最後の週に召集される臨時総会をもって発足予定である。各研連委員会の任務は基本的に次期の研連活動が開始される10月20日迄である。

< 第132回総会および連合部会報告 >

配布資料に基づいて以下の項目等について説明があり質疑応答等の意見交換を行った。

- 1) 各部，常置・特別委員会，研連委員会報告がなされた。
- 2) 学術会議50周年記念行事委員会，安全に関する緊急特別委員会などの任務が完了し委員会が廃止となった。
- 3) アジア化学・化学技術推進機構の設立（タイ国 Chulabhorn Res. Inst. のキャンパス内）承認。
- 4) 女性科学者の環境改善具体策と男女共同参画の推進についての声明について。
- 5) 「人間としての自覚」に基づく教育と環境両面の統合的解決を目指した声明の決議等について。
- 6) 学術会議の会則一部変更について（部会名の変更で以下の通りに改正する；組織・制度（旧第一），学術と社会（旧第二），学術の在りかた（旧第三），学術体制（旧第四），学術基盤情報（旧第五），国際協力（旧第六・七の統合））。
- 7) 日本学術会議の運営細則に関する内規の一部改正について（研連の委員最大で3期連続までとなっているが，国際学術団体の執行機関役員に限って，任期中中等の場合は運審の議を経て指名・委嘱を可能とする処置の承認）。

< 学術会議第4部会報告 >

- 1) 平成14年度の時限付科研費細目の推薦は，極域科学，標準，宇宙観測新技術の順で推薦した。
 - 2) わが国における理学軽視の風潮を憂慮し，今後の改善を願い「理学（基礎科学）研究の振興について」を公表した。
 - 3) 物理学研連報告と化学・生物・地学の教育の現状と提言についての対応について。
 - 4) 国際熱核融合実験炉（ITER）計画ワーキンググループ報告について。
 - 5) 分子レベルの構造生物学の推進に向けての報告について。
 - 6) 学術刊行物の指定審査について。
- < その他 >
- 1) 地質研連からIUGSに推薦していた委員の内，IUGS副会長に佐藤正氏が当選した。また，IGCPの役員改選で複数を推薦していたが，島田允堯（九大）氏が当選した。
 - 2) 動物命名法小委員会について
 第1回（4月10日），2回（6月1日）動物科研究連絡委員会（動物研連）（野田浩司委員出席報告）
 動物研連動物命名法小委員会による国際動物命名規約第4版日本語訳作業は平成11年5月から開始され，平成12年4月にはほぼ完成し，その後若干の修正が行なわれた。日本語版出版は国際動物命名規約委員会から翻訳の許可・翻訳販売経費などの諸手続を完了させ，直ちに

発行の予定である。発行は日本動物分類学関連学会連合（代表 馬渡峻輔），監修が日本学術会議動物科学研究連絡委員会となり，西田輝昭（名古屋大学）・野田泰一（東京女子医科大学）が訳者（編集）となる。なお，発行部数は1000部を予定し，1冊3500円程度で8-9月頃の出版に向けて準備中である。

- 3) 第18期学術会議会員の推薦が行われ，本研連と関連する分野の会員として，齋藤常正会員・青木謙一郎会員は継続で新たに米倉伸之氏が内定した。

審議事項

(1) 古生物学タイプ標本について

幹事より配布資料に基づきタイプ標本類のデータベースの集計状況が説明された。6月15日現在までに17タクサの約7200件について集約されている。しかし全体を見て，以下のような不統一等の問題が指摘された：文献一括式のもの，緯度経度の未記入，登録機関略号の不統一，産地記述詳細度の相違，Syntype (Cotype) や Paratype 記述の不統一，有効名などに関する Remarks など。これらの体裁等の不統一や不完全などは，出版までにさらに修正等の編集作業が必要である。これらのデータは，実際の標本保管場所の確認や登録番号の変更・他機関への移管などの確認が行われていないものが大半である。

これらの報告を受けて，今後さらなるデータ集約実施方法や，これまでのデータの出版について議論し，以下のような方針を確認した。

- I. 第一次分として10月を目途に編集作業を終えて，完成度の高いタクサのデータを出版する。これらの編集作業はタクサ責任者と本研連幹事・委員長で協議して行う。
 - II. 今後のタイプ標本データベース集約・出版等について今期の活動を継続するよう18期研連に申し送るが，その実務は日本古生物学会に依頼する。
 - III. これらのデータを基本に，研連として具体的状況を把握しながら，さらに標本の保全やキュレクター確保などの提言に向けた活動を展開するよう次期研連に申し送る。
- (2) 地質科学関連学協会について
 本学協会の設立に向けての現状が報告され，今後本研連としてサポートする立場で見守ってゆく事を確認した。
- (3) 18期委員会への申し送り事項について
 次の事項を次期の研連申し送りとした。特に今期の活動状況を踏まえ，本研連委員の推薦母体となる学会等について協議し，世話役の齋藤会員に変更等をお願いした。
- I. 模式標本類データベースの集約と出版等をさらに推進すること。ただしその実務は日本古生物学会と協議しながら進める。
 - II. 研連の基本的な役割である，大所高所の立場から，わが国の古生物学全般に関する議論を行い，具体的提言を行ってゆく事の任務・役割の再確認。特に上記模式標本の保全全般に関する具体的提言のさらなる検討。及び地質科学関連学協会の設立に向けて支持することの確認。
 - III. 次期研連委員推薦依頼で，これまでであった日本生態学会1名を取りやめ，これを第四紀学会に当て，結果的に第四紀学会から2名の委員推薦を依頼する（研連の構成定数12名：次期は内訳を，学術会議会員1名・日本古生物学会6名・日本第四紀学会2名・日本地質学会1名・日本動物分類学会1名・日本植物分類学会1名とする）。
 - IV. 地方博物館等の関係者で，特に博士の学位取得者に科研費申請権利を与えるよう現在の制度の改善要求をさらに検討すること。
- (4) その他

- 1) IPAの開催が2002年オーストラリアで開催予定の1st Paleontological Conventionまで先送りとなり，齋藤会員が日本代表としてこの開催期間まで任期を継続することとなった。
- 2) 国立大学協会における国立大学独立法人化に向けた声明文等について，意見および情報交換をした。

第17期・第10回第四紀研究連絡委員会議事録

日時：2000年4月10日(月)10:30～13:00
 会場：日本学術会議
 出席：鎮西清高 太田陽子 小野 昭
 欠席：大場忠道 小泉 格 小野有五 小池裕子
 坂上寛一 町田 洋 酒井潤一 砂村継夫
 増田富士雄 吉川周作(順不同敬称略)

1. 報告事項

- 1) 学術会議報告(鎮西清高氏)資料あり。
 - 1. 科学研究費補助金審査委員の推薦問題 審査委員の推薦は全て関係研連(窓口研連)がとりまとめるが行うがその際、対応研連に相談する。但し、少なくとも平成12・13年度に関しては、歴史的経緯から第四紀研連には推薦願いを予定せず従来どおりとすることが報告了承された。
 - 細目地質学：
地質科学総合(窓口) 地質学 第四紀 極地
 - 細目古生物学：
地質科学総合(窓口) 地質学 古生物学 第四紀
 - 2. 「地質科学関連学協会連合」が平成12年3月27日に創立集會がおこなわれ創立に参加を表明した学協会は15である。
 - 3. 海外派遣 第四紀研連からはゼロ
 - 4. 1月17日～23日まで、淡路島で「北淡活断層国際シンポジウム」が開催された。

2. 審議事項

- 1) シンポジウムの開催
 - 1. 「更新世/完新世移行期の年代論と考古学・人類学」は2000年6月開催予定で準備を進めてきたが、2000年8月の日本第四紀学会の大会シンポジウムとテーマも人も重複するのでとりやめを提案し了承された。
 - 2. その他新たなシンポジウムテーマの提案があった。
 - 3. 国際シンポジウム(INQUAの海面変化のコミッションとネオテクトニクスのコミッション)の紹介があった。第四紀研連として後援する方向で対処することとし、正式には次期に申し送る。
- 2) 次期委員の選出について

研連の活動と国際組織の活動との連携を密にするために、INQUAのコミッションとの関連、ならびに第四紀学会幹事会との連携に遺漏のないようにする。
- 3) 科学研究費補助金審査委員の推薦問題に関する要望してきた経緯から、第四紀研連には平成12・13年度に関しては推薦願が来ず従来どおりとなること了承された。しかし、平成14年度以降は実質的になるように要望する。

第17期・第11回第四紀研究連絡委員会議事録

日時：2000年6月10日(土)13:30～17:00
 会場：東京大学出版会会議室
 出席：太田陽子・鎮西清高・大場忠道・小野昭・小野有五・酒井潤一・小泉格・小池裕子・砂村継夫・町田 洋
 欠席：増田富士雄・吉川周作・坂上寛一

1. 報告

- (1) 日本学術会議 鎮西氏報告(資料配布)
 - a SCJ連合部会(6.05)
 - ・学術会議が公表する要望・声明案について討議：アジア化学・化学技術推進機構設立；女性科学者の研究環境改善；学術会議における男女共同参画推進；教育と環境両問題の統合的解決
 - ・自己改革の一貫として学術会議会則、運営細則改正案討議：常置委員会の名称を番号から具体的名称に変更、分掌事項整理；審議・審議記録の公開；将来計画委員会に代り企画委員会を発足。なお、部会や研連の会議を公開

- する問題について議論されたが、論議は収束しなかった。
- b 第4部会(6.06-07)
 - ・上記要望・声明案討議。
 - ・対外報告討議：生物物理研連提出「分子レベルの構造生物学推進」、物理研連提出「物理教育の現状と提言」(指導要領と教科書検定；高校までの教育と大学教育との乖離)、地域研究専門委員会提出「地域学推進の必要性提言」、イータ計画WG報告(熱核融合国際計画の意義とそれへの対応)
 - ・平成15年度以降の科研費時限付細目の推薦。第四部としては「極域科学」、「標準」、「宇宙観測技術」の順で推薦。
 - ・研連の見直し問題について、従来討議内容を淡々と次期へ申し送ることにした。
- c 第132回総会(6.07-08)
 - ・インタ-アカデミーパネル、インターアカデミーカウンシルへの加入承認・常置委員会の名称(学術と社会常置委員会の事項：従来の「学問・思想の自由および科学者の倫理・社会的責任および地位の向上に関すること」を「学問の自由および科学者の倫理・社会的貢献に関すること」とする提案に論議が集中。説明書作成、議事記録を付加して承認。
 - ・運審付置企画委員会とアジア学術会議委員会の設置、将来計画委員会の廃止決定。
 - ・上記aの要望と声明を字句を一部修正して採択。
- d 地質科学総合研連科研費審査委員の推薦(4.24):地質科学関連3細目(地質学、層位古生物学、岩石・鉱物・鉱床学)の審査委員候補者の推薦順位を決め、第四常置委員会に推薦。地質科学関連学協会連合：創立集會3.27開催。6学会(日本古生物学会、日本地学教育学会、日本地質学会、日本応用地質学会、東京地学協会、日本岩石鉱物鉱床学会)を幹事に選出。
- e 第四紀研連に関する問題
 - ・平成14年度から始まる科研費時限付細目は「ジェンダー」「生物多様性」「水循環」に決定。
 - ・研連委員の任期上限：原則は3期まで。余人に代え難い場合は4期まで可。国際組織の役員ではその在任中は研連委員として在任できる。ただし3期以上務める場合、任期終了の都度、運審の議を経る。
- (2) その他

第17期研連の活動状況に関するアンケートに返事(委員長)「学術の動向」に載せたパンフレット(委員長)

2. 議事

- 1) 研連主催/共催シンポジウム
 - ・「--21世紀に向けての我が国古海洋学の展望--プレ第7回国際古海洋学会議(IPC7)」9/22(金)10時～17時 日本学術会議会議場 主催(鎮西清高・小泉 格・大場忠道担当)
 - ・「明日のテフラ研究」10/6(町田 洋・吉川周作担当)以上2件承認。その他懸案のシンポジウムについては、第四紀学会と連絡しながら継続審議することになった。
- 2) INQUA 大会招致検討委員会

目下開催場所、経費について情報を収集中。
- 3) 次期研連への引き継ぎ事項
 - a 第17期の討議事項は第四紀通信所載の議事録参照。主な事項：INQUA大会への参加、特集号編集、INQUA大会招致検討委員会発足、シンポジウム開催など。参考資料としてINQUAに関する説明、第17期の活動に関するアンケート、学術の動向を付す。
 - b 次期でも第四紀研究の発展・普及のためにシンポジウムを多数開催することを希望。
 - c INQUA大会招致検討委員会の継続：必要な委員の選出を研連と第四紀学会に依頼。
 - d 次期研連委員の選出に当たって、第四紀研究にとくに関心の深い人を選出するために資料(第17期委員の会議出席状況)を添付。

記録 町田 洋

米倉伸之会長が日本学術会議第18期会員に選出される

日本第四紀学会から地質科学総合の会員候補として推薦された米倉伸之会長が、推薦人会議における選挙の結果、第18期会員に選出されました。

日本第四紀学会 1999年度第7回幹事会議事録

日時：2000年5月13日(土) 10:30～13:00
会場：筑波大学学校教育課 合同会議室 (E233)
出席：米倉伸之、熊井久雄、真野勝友、斎藤文紀、
中村俊夫、鈴木毅彦、松浦秀治、竹村恵二、
宮内崇裕、中川庸幸
欠席：奥村晃史、福澤仁之、小田静夫、太田陽子

報告事項

(1) 庶務

会員消息 2000年2月と3月分の報告。前回以降9機関から図書が寄贈。学術会議会員候補(米倉伸之)の承認連絡の報告。評議員会で承認された研究委員会への連絡通知送付報告。3月末締め切りの論文賞推薦は1件あり、選考委員会を準備中。前評議員の麻生優会員逝去に対し、生花送付報告。

(2) 行事

第四紀学会 2000年大会の第3報第四紀通信原稿の確認。5月10日に開催された大会の実行委員会の内容報告。プレシンプは無料。普及講演会は行わず、代わりに特別講演を行う。シンポジウム向けに主要縄文遺跡の14C年代資料集の作成(刊行計画を提出してもらう、前向きに検討)。シンポの考古学ジャーナルからの出版に関しては、著作権の問題もあるので第四紀研究の特集号からの引用形式で行ってもらう。更に要検討。2000年合同大会は第四紀セッションのプログラムを通信に掲載予定。

(3) 企画 報告なし

(4) 会計

会誌印刷費は若干赤字だが問題なし。会報印刷費も予算通り。現状での収支バランスは特に悪くない状況。

(5) 編集

39巻3号を現在印刷中。4号はシンポジウム特集号。5号は掲載論文2編が確定済み。2000年の投稿論文数18編。

(6) 渉外

地球惑星科学関連学会関係で2001年以降の体制についての近況報告。は東大案の賛成、参加学会への負担はs表は2000年大会に向けて現在プログラムの作成中。自然史学会連合関係、地球環境科学関連学会協議会は特になし。

審議事項

(1) 庶務

千葉県立中央博物館からの日本第四紀学会プレシンプ共催依頼の承認。「日本第四紀地図」のCD-ROM化と有限会社ジオデータサプライからの販売承認。「ヒマラヤ・チベットの上昇と地球気候変動」(2000年9月29日)国際シンポジウム実行委員会(在田委員長)からの後援依頼の承認。国際シンポジウム「The Assembly and Breakup of Rodinia and Gondwana, and Growth of Asia」(2001年10月26-30日;大阪市立大学内ISIRGA事務局)からの後援依頼承認。会費滞納会員への督促通知を行うことになった。学生会員には毎年学生証明を提出してもらうことになり、次号の通信に関連案内文を掲載することになった。

(2) 渉外

2001年以降の合同大会の開催方式に関しては、東大事務局提案に賛成。日本第四紀学会としては参加学会へ均等に負担を強いる案に対しては反対し、核となる学会を中心に運営できるように要望することとなった。

(3) 編集

INQUAの報告別刷は学会から50部負担で承認。編集予算が超過しているが、他の予算の黒字分で補てるので超過を承認。

会員消息 2000年4・5月分

退会者:

松本繁樹・中津由紀子・若林一成・加藤文男・
中新田育子・上野秀一・塩原鉄郎・関根 清・
高橋 勲・西川 誠・原 雄・宮脇 昭・矢野牧夫・
黒田 進・長谷憲治・西垣好彦・大西智文・佐竹伸一・
稲垣秀輝・津田秀典・LEOUNAKIS Myra・
BRAHMANTYO Budi・国立天文台水沢観測センター

逝去退会:

麻生 優・豊島吉則

第四紀通信に原稿をお寄せ下さい

広島大学文学部地理学教室 奥村晃史 〒739-8522 東広島市鏡山1-2-3

kojiok@hiroshima-u.ac.jp

Phone: 0824-246657 Fax: 0824-240320

メールアドレスが変わりました

次号は9月上旬原稿締切 -10月上旬発行予定です。
インターネットにアクセスできる方は第四紀学会ホームページ
<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/qr/> で最新情報をチェックして下さい。